

主体、^{ジェンダー}性、文化

松 本 伊 瑳 子

(1)

ボーヴォワールは主体とその意識のあり方に関して、『第二の性』において、以下の
ように述べている。

どんな集団も、自分を 一者 として定めるときは、ただちに、必ず自分の前に
他者 を対立させる。〔略〕こうした現象は、人間の現実が連帯と友情に基づく共存^{ミットザイン}
ただだとしたら理解できないだろう。〔略〕主体は対立することによってのみ、自分
を定める。つまり主体とは、自分を本質的なものとして主張し、他者を非本質的なもの、客体にしようとするものなのだ。¹

もし、もともと人間とその仲間との関係がもっぱら友好的な関係だったとしたら、
どのようなかたちの隷属も説明がつかないだろう。隷属という現象は、自分の絶対権
力を客観的に実現しようとする人間の意識の帝国主義の結果なのだ。もし人間の意識
に、他者 という本源的な範疇^{カテゴリー}が存在しなかったら、他者 を支配しようとする本
源的な主張がなかったとしたら、青銅器の発見が女の抑圧をもたらすことはありえな
かっただろう。(DS125)

人間には他者を支配しようという帝国主義的意識があり、しかも主体は他者を非本質
的なもの、客体にしようとすると言うのである。ところで、人間を意味する man, homme
という英語やフランス語が、それぞれ男をも同時に意味することは、周知の事実である。
男であることと人間であることの間には断絶がない。では、男 = 人間であること、およ
びその価値とは何であるのか？ ボーヴォワールは次のように述べている。

男は単に既存の世界を保存するよう努めたのではない。その世界の境界を打ち砕き、
新しい未来の基礎を築いたのだ。

〔略〕戦士は自分の属している遊牧民族や氏族の威信を高めるために、自分の生命
を賭ける。そうすることによって、人間にとって最高の価値は生命ではないこと、生
命は生命よりもっと重要な目的のために役立てなければならないことを見事に証明す

るのだ。女に重くのしかかっている最大の不運は、女がこうした戦士たちの遠征から除外されていることである。人間が動物を凌駕するのは、生命をもたらすからではなく、自分の生命を危険にさらすからである。人類においては、産む性ではなく、殺す性に優越性が与えられているのはそのせいである。(DS137)

ボーヴォワールにとって、生命を産み育むというのは、単にそれだけのことでしかない。生命そのものより、そしてまた場合によっては、生命を守ることより生命を殺してまで守る・達成する大義があり、価値があるというのだ。

女に対して男が自分を主人と定めたのは、人類が自分の存在のあり方を問題にするから、つまり、生命よりも生きる理由の方を選ぶからなのである。(DS140)

ボーヴォワールにとり、人間として価値ある生き方は、投企 (projet) を通して、自分を超越することである。

すべての主体は、様々な投企を通して具体的に自分を超越として立てる。すべての主体は、新たな自由に向かってたえず自分を乗り越えることによってはじめて、自由を実現する。果てしなく未来に向けての発展こそが、現に生きている実存を正当なものにするのだ。(DS37)

projet (投企) とは、フランス語で日常的に使用される語であり、計画 を意味する。つまり「投企を通して自分を超越する」とは、平易に言えば、何かの計画を立て、計画実現により、現在の自己から別の自己へと自己同一性を保ちながら自己を高めていくことに他ならない。この「自己超越」の道を阻害し、自己疎外を招く原因となるものは、したがって極力避けた方が良いということになる。ところが女にとって、妊娠・出産・授乳という女の身体機能が、女を「あらゆる哺乳類の雌のうちで、最も徹底的に疎外」(DS84) してきた原因なのだとボーヴォワールは考える。男が妊娠・出産・授乳・育児という自分達とは異なる生き方をする女を、自分達と平等・対等な存在とは認めず、客体にしたのもそのせいだと言うのである。ボーヴォワールは性行為とその結果についての男女差を以下のように捉えている。

雌は性行為をじかに内的な出来事として体験するのであり、世界や他者との関係として体験するのではない。しかし、哺乳類の雄と雌の根本的な違いは、オスの生命は精子を通じて自己超越し、他者になるが、その同じ瞬間に、精子が雄とは別のものに

なり雄の身体から離れるという点である。したがって雄は自らの個性性を超越するま
さにその時に、ふたたび個性性を堅持することになる。(DS70)

自分の身体から栄養をとって育つ他者を宿している雌は、妊娠期間中ずっと自分自
身であると同時に自分以外のものでもある。出産後も、雌は自分の乳房から出る乳で
赤ん坊を養う。だから、赤ん坊をいつ自律的なものと見なせるのか、よくわからない。
受精、誕生、離乳、どの時点なのだろうか。雌が個体として分離したものに見えてく
るにつれて、逆に、生命の連続体がますます絶対的なものとして、あらゆる分離を越
えて確立されることは注目に値する。(DS71)

男は子供を作る行為において、射精すれば十分であり、子供の誕生後も女が養育に当
たるかぎり自己の社会生活を送る上で、子産みは如何なる不自由ももたらさない。常に
自律した存在であり、他者と自分を区別してられる。他方、女の方は、受精後から、
場合によってはつわりや段々大きくなる腹部により身体活動が制限される。病気になっ
ても、男は平気で服薬できても、女は胎児への影響を恐れて、服薬さえまならない。
妊娠により、女は自他の区別が不明瞭になる。自律性と個性性を重んじる 男性的考え
方 に立てば、女の性行為とその結果はまさに次のような言葉で表現される。

雌は、〔略〕性器挿入と体内受精によってその自律性を奪われる交尾を強いられる
のだ。(DS70)

雌はまず犯され、次に疎外されるのである。雌は胎児が成熟期に達するまで胎内に
宿している。(DS71)

主体とは、まさに男がそうであるように、自律的・個別的であり、投企によって自己
超越する者のことであり、そのような生き方は生命そのものより価値がある生き方であ
る。男は常に自律した存在でられるが、女は妊娠すると同時に、もはや自分の自律性
=個性性を保持できなくなる。しかも自己超越の道を中断されてしまう。個別性を維持
し、自律を保ち、投企により自己超越すること、これが人間の最高の生き方である。
ボーヴォワールの考えをまとめれば以上ようになる。ボーヴォワールがそれゆえ女性
機能を嫌悪し放棄したことは、いまさら述べるまでもない周知の事実であろう²。彼女
はかくして「女になる」³ ことを拒否したのである。このようにボーヴォワールは西洋
流の二元論に基づく思考法を受け入れ、生命自体よりも生きる目的に、「産む性 = 女」
より「殺す性 = 男」に優越性を与え、自身もそれに従って 男性 (= 人間) 的生き方

をすぐれたものとし、その 男性的 生き方を我が物としたのである。

しかしながら問題はこのように歴然としてある生物学的性差を、男の身体をメルクマールとして、そこから外れているという理由で、客体化する文化・社会の方ではないのか。問題は又、ボーヴォワールが、 男性的 価値観、 男の生き方 を人間としての価値ある生き方と捉え、それに対する何らの反省がないという点にある。彼女の主張に欠如しているものは、まず第一に、他者・非本質的なもの・客体にされる女の痛み、次に、隷属という現象をもたらす人間意識の帝国主義に対する非難、そしてさらには、妊娠期間中自分であると同時に他者でもあるという女独特のあり方を肯定的に捉える視点である。

しかしまた他方で、現実問題として、女性が再生産の役割に閉じ込められ、「投企による自己実現・自己超越」を阻まれていたことも事実である。したがって、女性解放運動が、ボーヴォワールの言葉を引用するなら、女性の「種に対する隷属」(DS92)からの解放、つまり女性機能としての妊娠・出産・育児の負担を軽減する方向に向かってきたこともまた事実である。例えば保育園等の社会的施設や育児休暇等の制度上の整備も、このような考え方の延長線上にあるといえるであろう。ボーヴォワールの申し子であるシュラミス・ファイヤーストーンが科学の未来に女性機能を代替させる夢を無邪気に表明したのも⁴、ボーヴォワールのこのような考えの延長線上にある。

しかしボーヴォワールのように「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」⁵と尝试してみたところで、「女になること」、つまり客体に墮してしまうことが女の身体機能に基づくのであれば、女が客体から逃れ出る道は、女の身体性の拒否でしかなくなってしまい、結果として自分の身体を、女を、生きることが女には不可能になってしまう。それよりも、男の生き方がメルクマールとなり、男=人間となるような文化・社会のあり方や価値観をこそ問題にしなければならないのではないか。女がその身体性を引き受けても、疎外されることのない社会をこそ作らなければならないのではないか。

ボーヴォワールが同一化した 男=人間 としての生き方である「投企による自己超越」やそのような主体のあり方を負の側面から捉えるとどうなるのか？それを次節で検討してみよう。

(2)

1975年の『アルク』誌、「ボーヴォワールと女性の闘争」特集号に、エレーヌ・シクスーのエクチュール・フェミニンの宣言書として名高い「メデューサの笑い」が掲載された。シクスーは当時フランスの植民地であったアルジェリアで生まれたユダヤ人である。したがって、その体験から、二項対立的思考法による 男性的生き方 をボーヴォ

ワールのように、無邪気に我が物とはできなかつた。シクスーがボーヴォワールとは逆に 女の生き方 を肯定的に捉え、 男の生き方 を非難するのは、男=人間 の生き方が生み出した負の側面、つまり帝国主義、植民地主義の体験から発している。帝国主義、植民地主義、女性蔑視といった現象を生み出す社会そのものを転覆させ、「殺すこと」に優越性を与えないような社会を到来させることが、彼女にとっては、まさに自分や家族の生命の存続に関わる重大事だったからである。だから彼女は、この男性中心社会をボーヴォワールとは異なるやり方で分析した。シクスーは、男性性の価値を全面的に否定したわけではないが、男性中心社会の負の面を分析することに、主眼を置かざるをえなかつたのである。

シクスーによると、女性が「神秘」や「無知」「沈黙」の位置を占めるように強いられているのは、女性を「ヒステリー患者、もしくは不在者の位置」⁶へと男性の欲望が導いているからであり、このような男性中心社会は「プロブルの帝国」と呼べるものである。

プロブルの帝国とは、社会一般に見られる文化的かつヘテロ社会的制度という意味であり、この帝国ではプロブルなものとしての男性が統治しています。〔略〕

《プロブル》とは語源的には《近さ》であり、自我から分離されないものです。〔略〕

プロブルの帝国、および文化は、所有しようとすることで機能しています。これは自分が接収されたり、何かが奪われているのを見るという男性の古典的恐れ、つまり奪われることに対する、分離状態にあることに対する男性の拒否、属性をなくすことに対する男性の恐怖によって分節され動かされます。この恐怖に対する答えが、「歴史」全体です。あらゆるものが男性のもとへ戻ってくる必要があるのです。(M67 - 68)

自己本来のもの、自分自身、自己固有のもの、固有財産、これらがプロブルなものであり、男は、自己という個別性と、自己固有の財産を守りたがるのである。このような個人的所有欲を基盤とし、男根 男根とは力の象徴である 中心的な経済的価値の牛耳る社会の男性の特徴としてシクスーが述べているものを分類すれば、以下のようになる。

1. 等級^{クラス}=階級や修辞学、勅令や法規といった仕切りを使用する。
2. 自分の肩書きや自分の称号、有価証券、頭^{かしら}(脳)、栄冠、自分の上役に属するすべてのものに固執する。
3. 対立し合い、序列化的交換、支配への闘いを行う。
4. 帳簿に記入される命令や刑罰付きの教育で、常に言うことを聞かない女性を斬首

して教育してきた。

5. いつも戦いや闘争に関わっている。闘争がない場合には、闘争の賭け金である策略や計算をめくらせ、最小限の損失と最小限の出費で《いかに勝つか》を考える。

シクスーによれば、男が強烈な自我意識をもって主体的に生きるとしても、それはプロブルの帝国を築き上げるためであり、その結果、富に対する固執や、富を得るための闘いがおこり、他者に「勝つこと」しか考えなくなる。他者は殺戮や迫害の対象となる。また、男/女、同一者/他者という二項対立的思考法において、結局女=他者とは、男=同一者 が、男に都合の良い偽りのイメージでもってでっち上げたものでしかなく、しかもそれを女が内面化してしまったということである。まさに女性性とは文化的・歴史的・社会的に作られたものだということである。

抑圧の法外さにもかかわらず、今日においてさえ、一般的女性、典型的女性というものは一人としていない。(M 8)

彼らは女性たちに反・自己愛をうえつけました！つまり、自分の持っていないもの〔=男性が女性に与えようとする偽りのイメージ〕によって〔男性に〕愛してもらう、そのような自分しか愛さないという自己愛です！(M12)

男によって作られた偽りのイメージは、歴史的なものでしかなく、もうこのような考え方を未来に持ち越してはならないということになる。女に不自由を強いる差別を作り出し、容認し、持続させようとする文化や社会から、つまりジェンダーの呪縛から女を解放するにはどうすればよいか、その方途としてシクスーは男の身体とは異なり、男にはない身体経験を書く(エクリチュール・フェミニン)ことを提唱する。それはボーヴォワールが「生命の連続体がますます絶対的なものとして、あらゆる分離を越えて確立されることは注目に値する。」と言って認めたような体験である。ボーヴォワールは自身の体験において女性の再生産機能から一步距離をおこうとしたために「注目に値する」と言っただけでそれ以上追及していない。だからボーヴォワールには、女が^{セクシュアリティ}性行為を性交や受精、妊娠も含め、「雌は性行為をじかに内的な出来事として体験する」ことの豊かさが分かっていないのだ。またそれは、「世界や他者との関係として体験するのではない」のではなく、まさに他者との 新たな関係 として(つまり男が体験できないゆえに今まで認識されてこなかったという意味においての 新たな関係 として)の体験である。性交とそれに続く結果を「犯され、疎外される」と見なす観点は、女に必ずしも共有されているわけではないのだ。差別としてのジェンダーから解放され、各人

が自らの肉体を放棄することなく、全人的に生きていけるような社会・文化・男女の関係等々を新たに構築していくために、「殺す」ことにはなく、生命を「生かす」ことに価値を置くような社会、他者と、主体・客体関係ではない別の関係性を持った社会を、男と女のエロスが「犯す・疎外する」関係ではなく、「別の愛」(M44)の関係を築く社会を新たに構築するために、シクスーはエクリチュール・フェミニンにおいて、この社会がその価値を認めていない女の体験を書けというのだ。男とは異なる人生を生き、そこに男の知らない、認めていない価値を男に発見させるために、シクスーは女に自分のことを書け、女という性^{ジェンダー}にとつての快樂 性的快樂 を書けと、エクリチュール・フェミニンを提唱したのである。

したがって、シクスーの言う性的快樂を狭小的にオルガスムと捉えてはならない。女という性^{ジェンダー}が形成してきた世界や文化の中で、女にとっては男とは別の快樂・喜び・価値があったはずである。文化的・社会的に囲い込まれた生き方の中で、女という性^{ジェンダー}に特有の快樂。男が、プロブルの帝国を築くことに 男性的 快樂を見出してきたとしても、女には別の喜びがあったはずなのである。それは「性行為は内的な出来事である」と同時に、世界や他者との、男性とは異なる関係性の体験、「別の愛・他者の愛」(M44)の体験なのである。母である女は子供という他者と、男が他者と結ぶ関係とは異質の関係を結んでいるのだから。

子供は他者ですが、暴力のない他者、破滅や闘争を経ることのない他者なのです。
(M40)

ボーヴォワールが示したような「非本質的なもの」「客体」「隷属」としての他者、男がそのような他者に対する時とは異なる関係を、女は他者に対して持っている。女のこの他者に対する関係性をエクリチュール・フェミニンを通して記述することは、女を男に都合のよいイメージから解放して「新しい女」にすると同時に、男をも変化させる可能性を秘めている。したがって、シクスーが以下に述べているような、エクリチュール・フェミニンを通して到来させるべき「新しい女」(そして男も)(M13)の取るべき行動は、シクスーが 女性性 と捉えている性質の、実は、プラス面である。

1. あらゆる経済を動かしている所有化の動きに抵抗すること。
2. 計算と手を切ることになる関係を示す。そして見返りに何かを奪い取ることのない贈与の可能性、贈与のための贈与について語る。
3. 生き生きした他者、救われた他者、殺戮の強迫を受けない他者を到来させる。
4. 女性の性的快樂について語ることで、男性をもその男根から解放し、変化に富み、

拡散しているリビドーを取り戻させる。

5. 統治法ではなく、幻影や無意識を取り上げるテキストを書く。
6. 女のテキストは声に近く、耳から入り、もっとも内奥のところに入る。
7. 無意識の次元における両性具有とは、他者の中に自分を拡散していく可能性であり、他者との関係にいる可能性であって、その結果、他者を滅ぼすことなく他者の中に私が移動し、すべてを私に引き戻そうとすることなく他者のいるところに他者 = 男女を捜しに行く。(以上 M、68 - 79)

シクスーはこのように、男の自我のあり方、自分や自分に近い者 = 同一者にのみ向けられた意識のあり方に対立するものとして、女の意識、母の意識を対置している。

女性は異質な要素でできていますが、このことが喜ばしくも、女性を性的にするという利益をもたらしているのです。彼女は異質性の性感性です。彼女が固執するのは自分自身ではありません。彼女は、〔略〕他者になれるのです。(M37)

「女 = 母」は「他者の中に自分を拡散させる」ことが可能だし、「他者との関係にいる」。そして「他者」を探しに、つまり他者に関心を示し、理解し、「刑罰付きの教育」ではなく、愛の関係を築くことができる。この女 = 母は、他者の考えの中に入り、

その中で、女性はいつも限りなく一人以上、私以上の存在になります。彼女は、私たちの生成を享楽する人なのです。私たちは享楽にけりをつけたりはしないでしょう！〔略〕吝嗇な自己愛を越えて、絶えず様相を変え、開かれ、過渡的な空間の中で、彼女は彼女の危険を冒します。〔略〕愛すること、他者の中に他者を 見つけ・考え・探すこと、脱・鏡像化すること、脱・投機化すること。(M45)

ここでシクスーが述べているのは、ボーヴォワールが考えもしなかった 女の主体性であり、他者との関係性である。母に象徴されているシクスーの描く女は、他者との関係性の中で、他者から学び、それによって自己超越をする。しかしシクスーは声高には言わないにしろ、そのような生き方の危険性も気づいている。「彼女は彼女の危険を冒します」とは、男の冒す危険、つまり他者との戦いにおいて生命を落とす危険ではなく、他者との関係性の中で、自己を見失う危険性であろう⁷。

(3)

ボーヴォワールは女性問題を、その権利獲得問題としてではなく、主体 / 客体の問題として捉えた。女性が主体として生きられず、客体の位置に貶められていることを問題にした。ボーヴォワールにとって、男 = 人間は、自律的・個別的な存在であり、ボーヴォワールにとっても男にとっても 如何に自分の人生を生き、自己超越をするか が問題であった。

ボーヴォワールやシクサーの捉える女は、母親業に代表される生き方であり（もっともシクサーは、母親業としての女ではなく、象徴的な意味で母と言う言葉を使うと断っているが）、その自我は他者（である子供）にも、自己と不可分のものとして向けられる。他者に向けられた意識は、もはや男の自我意識とは別個のものであろう。問題はこの他者に向けられた意識、女にとってみれば、私の意識でありながら、他者にも向けられた意識、こういう意識のあり方を呼ぶ名称が存在しないことである。母としての女は、他者に向けられた関心を中心となる生活を送るのであり、当然、男の自律的・個別的な主体的自我意識とは別の 自 + 他意識 をもつ存在である。これは完全なる自我意識、つまり 男 のもつ自我意識・主体意識と同一ではないので、自 + 他意識 の持ち主は、もはや男性的個別的自律的主体を「主体」と呼ぶなら、「主体」とは呼びえない。自 + 他意識 の持ち主は、男性的自我意識 の持ち主から見れば、中途半端な、不完全な人間であり、したがって、物の位置、客体の位置を占めるのである。ボーヴォワールが 女性的主体 を嫌悪し、放棄し、「女になる」ことを拒否したのは、このような考え方によるのである。

しかし、女 = 母 が男のような「主体」として生きてこなかったにしろ、女にも 自我意識 もあれば、女独自の主体性 もある。問題は、男性中心社会において、そのような 女 = 母 の 自 + 他意識 や、自 + 他意識をもった主体 完全な個別的・自律的主体ではなく主体・客体合体型主体 相互主観的主体 といった、女性独特の主体の在りよう を示す単語が存在しないということである。シクサーが、「メデューサの笑い」や「去勢か斬首か」で分析して見せるのは、男性的主体 と というよりむしろ 男性的主体 のマイナス面の顕現としての 男根的主体 であるが、この名称を持たぬ 女性的主体 = 間主観的主体 の差異であり、また後者を指す単語がフランス語にはない、つまり 女 = 母 に代表されるような生き方がないがしろにされてきたという問題である。シクサーはボーヴォワールと違って、女性的主体 に積極的な価値を見いだそうとしたのである。なぜなら、シクサーにとって、男性的主体 の牛耳る世界は生命の危険のある受け入れがたい世界であったからだし、また男が自律性と個性を尊重してプロブルの帝国を築いて来たとしても、それもまた、文化の結果であ

るからだ。セックスは文化と分かちがたく結びついているとはいえ、絶対的なものではない。シクスーが、男は「**何かが奪われているのを見る**という男性の古典的恐れ」によって動かされると言う時、彼女は男の去勢不安を指していると思われるのだが、女がその身体機能ゆえに 客体 の位置に貶められるとするなら、男は去勢不安のために、プロブルの帝国を築くようになるのである。

もし男性が去勢脅威で行動するのなら、もし男性性が**去勢脅威を受けるような文化の中で形を整えるのなら**、このような去勢恐怖は別の形、斬首、死刑執行、頭の喪失という形を取って、女性に影響を及ぼすのです。(M52)

男にペニスがあるとしても、男が去勢不安を抱くのは、文化 のせいだと言うのである。シクスーが 男根的主体 に陥りやすいものとしての 男性的主体 に代わるものとして 女性的主体 、つまり 母としての在りよう に未来の希望を託すのも、その理由による。男の在りようを変化させることができれば、プロブルの帝国も崩壊する可能性があるからだ。

男が他者より、より富を得るために、あるいはその強さを競い合うために、法を作り、競争が戦いにならずにすむように世界を仕組んできたことは事実である。(もっともそれは長い間 同一者 としての男たちの間だけの話であって、他者 である外国人は 法の埒外 にあったことは周知の事実である。)そして事業であれ、スポーツであれ、科学競争であれ、自己を投企し、自己超越をはかり、その結果文明を進歩させてきたこともまた事実である。こういう「男」の自我はもっぱら自己に向けられ、強烈な自己主張の下で男は主体的人生がおくれたのである。他方、女は男が権力を持った世界において、他者の位置に貶められ、男のような主体性はもてなかつたにしろ、女性的主体性、つまり 他者に対する関心と共にある主体 他者とは競い合わない主体 そのような主体性を育んできたのである。

このことはキャロル・ギリガンの『もう一つの声』にも述べられている。この中でギリガンは、男の声とは「異なる声」が、女の声と密接に関係してはいるが、この「異なる声」は性の違いによるものではないし、また二つの声の「相違は、社会的な状況を背景として発生してくるにちがいない」⁸と断ったうえで、女は男とは別の道徳性を持ち発達させるのだと説明した。ギリガンによると、男は、あくまで自己を他者とは分離し自律した存在として捉え、諸権利の競合から来る道德問題を、法遵守により、権利の倫理により解決しようとする。他方女は、自己を、他者との相互依存関係において、他者とのネットワークの中において捉え、「他者に対する責任と心配りの倫理」、つまり「だれもが、他人から応えてもらえ、仲間としてみなされて、だれひとりとしてとり残された

り傷つけられたりしてはならない」⁹ という倫理観で動くというのだ。この考え方は、既に明らかのように、シクスーの考えに通じるものである。このような女の自我意識、他者共感的主体は、他者との関係の中で発揮され涵養されるものであるが、これは、男の自我意識が自己に向けられるのに対し、自己のみならず他者や他者との関係にも向けられる意識である以上、それは純粋な自我意識とは呼べない、まだ名付けられていない意識のあり方である。しかし女がこのような意識を発達させ、何世紀も生きてきたことを考えれば、このような意識のあり方に名称がないというのは驚くべき事実であるが、女がまさに「第二の性」として貶められてきた結果と捉えるなら、それもまた納得のいくことである。男根的社会が、自己中心的主体と、他者とは分離し自律した主体としての生き方のみに価値を置き、女が培ってきた共感的主体 自+他混在型意識 間主観的自我・主体、人間関係のネットワーク中で自己を考える主体をないがしろにし、これが様々な社会的弊害を招いたとも考えられるのであり、まただからこそ、女性的主体性の価値を(再)発見することが、社会の改変につながるのである。ギリガンが、男子と女子が成長段階において別々の道をたどるにしろ、男子の「権利の倫理」と女子の「他者に対する責任と心配りの倫理」の両方を兼ね備えることが、一人前の大人になることであるとしたように、シクスーも本当の人間とは両性具有的だと述べていることに注目してよい(M79参照)。シクスーが「メデューサの笑い」で分析した男性的主体と女性的主体は正反対のものであるが、女性は女性的主体の中に閉じ込められてきたとはいえ、男性的主体に目覚めたために、両性性具有になろうとしているし、なりつつあると言っているのである。両性性具有とは、男性的主体性をマイナス面で、つまり男根的主体として捉えるのではなく、ボーヴォワールがその意識が帝国主義的であるとしながらも彼女自身がなろうとしたような男性的主体性、つまり肯定的に捉え得る男性的主体性と共に、女性的主体性つまり「力を回復させ、糧を与え、分離に逆らう母親的なもの」(M21)、「分離に逆らい、切断されるがままにはならない」(M21)主体性、このような両方の主体性を持った存在である。

現在歴史的・文化的理由から、この両性性具有を受け入れ、それから利益を得るのは女性であることがわかります。つまりある意味で《女性は両性性具有的》なのです。他方、男性は、単一のセクシュアリティを目指すべくしつけられている。(M25)

西洋において「母」の価値が低かったのは、人が自律的・個別的主体であるべきだという男性中心的考え方と不可分の関係にある。「母」は男子の自律を疎外する最大の存在である。それゆえ、「母」は、クリステヴァ流に言うならおぞましき(abjecte)存在であるし、また男子の自律を促すために、フロイト流に言うなら、父が母子間に介入して

去勢不安をうえつけるのだ。しかし 男性的主体性 のみが唯一の主体性なのではなく、女性的主体性 もありうること、そしてその両方を併せ持つことが、主体 / 客体関係、つまりは人間関係や社会そのものを改変する可能性を持つと、シクスーやギリガンらは考えたのである。

さて一方、日本においては、子供が自律することは、西洋ほど奨励されてはこなかった。西洋では母子は別々の部屋で眠るのが一般的であるが、日本では今でも同室就寝は、小学校中～高学年までよく行われている¹⁰。このような密着型の母子関係においては、「母」は「自我を捨てて子や夫のためにつくし、苦しみに耐え、子の支えとなり、限りなく許す」¹¹ 存在 まさにボーヴォワールが嫌悪した客体としての生き方 に陥りやすく、また男子の方は、マザーコンプレックスに陥りやすいが、同時に、西洋の男が 父の法 によって超自我を形成するのとは違って、無償の愛を注いだ母への感謝の念がその超自我を形成しているとも考えられるのだ。中川克子はその論文において、鶴見祐輔の小説『母』の分析を通して明らかにしたのは、「母の苦労に対する感謝を伴った罪悪感が超自我形成の契機となってきた」¹² 男、母への感謝・母への愛という道徳律・超自我によって「自律する男」の姿である。それは法規という「正義の倫理」ではなく 間主観的倫理 がその基本となる男である。これは西洋式の図式で言うなら、女性的人間ということになる。西洋的な男とは異なる 女性的主体 を持った日本の男の別の例として浅原才市を取り上げてみよう。

(4)

主体のあり方が文化と不可分の関係にあることは見てきた通りである。ところで文化を構成する大きな要素に宗教がある。才市は妙好人と呼ばれるほどの熱心な仏教徒であったし、また日本人も仏教伝来以来、長年にわたってこの影響下にあったので、日本人や才市の 主体性 を考える時、仏教という背景について考えることが必要である。ところで、キリスト教は、その神キリストが磔刑像として表されているし、旧約聖書をひもとけば、神にいけにえを捧げる等、暴力のイメージと深く結びついていることがわかる。また神 これもまた文化の産物であるが 、神は自分に似せて男を作り、男のために女を作ったのであるから、西洋文化において男が優位を占めたのは、男の権威が神の威光に守られてもいたからである。他方、あらゆる殺傷を禁ずる仏教は、およそ暴力のイメージとは縁遠い。仏教では、西洋的男性 は、凡夫として退けられる。阿満利磨は、凡夫、つまり仏になれない劣った人間とは、煩惱に縛られている存在であり、煩惱には、三種の意味があると言っている。一つは、欲が深いことであり、二つは生への執着心、そして三つは、自己と他人を区別し、自己の優越を誇り、自己を正当化する

のに熱心な精神であると言う¹³。このような自己愛を中心として生きる凡夫には、仏教の中核思想である「縁起」、つまりあらゆる存在は「相互依存の関係」にあるということを理解する力がない(S95)。ポーヴォワールの言う帝国主義的意識の持ち主としての男や、シクスーが描いたプロプルの帝国の西洋男性は、まさに欲望に貫かれ、自他区別の上で自我を主張する凡夫そのものだということになる。

仏教においては、分別智、つまり主客対立的認識判断は、人間の妄念の結果であり、事物のありのままの姿は、無分別智によって得られるとされている。各存在はいろいろな縁によって存在しているのであって、物そのものには、そのものを他と区別する不変の自性じしやう 今風に言うならアイデンティティ というものはない。無分別智によって、物事を分けることなく全体を見、個々の物は互いにつながりあっていることを知らなければならぬのだ。この考え方を男女に応用すれば、男性性 女性性 というものは存在せず、ただ男女の社会的関係性の中で、男が 男性性 とされている性質を、女が 女性性 とされている性質をあらわにし、発展させただけということになる。まさに 性性 = 性差 とはジェンダーだという考えに通じるのである。

ではこのように凡夫を否定し、「縁起」思想を基盤とする仏教的人間観、仏教的主体性の持ち主はどのような存在になるのか。浅原才市(1850 - 1932)は石見の国、現在の島根県に生まれ、船大工を経た後、下駄作りとその販売を営み、8000近くの詩を書きとめた。無分別智で見ると、生と死は別々のものではなく、一瞬一瞬、生と死を繰り返すことが、生きるということになる。また「無分別智で見るとすべてが極楽浄土である」¹⁴ということにもなる。極楽はあの世ではなく、この世だということになる。

才市や何処にある

浄土貰うて娑婆におる

これがよるこび なむあみだぶつ。(N75)

浄土とは浄(清浄)なる土地であり、浄とは「分別がない、分け隔てがない、差別がない、えこひいきがない、平等である、比較しない、上下をつけない、優劣をつけない、競わない」(N88)という意味である。浄土にあるものは、それぞれが「独立自尊であって、他との比較によってその存在価値を付けられるものは一つもな」(N88)く、「自分の存在そのものによってある」、「つまり自由に自在している」(N89)のである。従って、人にとってみれば、自分を他と比べる必要もなく、この世に存在していることは、仏の愛の中に含まれていることになり、自分も他のものと同じように自然の一部であり、仏から生み出されたものなのだ。

才市、どこが浄土かい
ここが浄土のなむあみだぶつ (N86)

わしが親様 大きな鏡で
世界 虚空 空気がわしが親様
なむあみだぶつ (N100)

念仏は凡夫を仏にするいわれ
これが阿弥陀のこころかな
なむあみだぶつ なむあみだぶつ (N98)

念仏を唱えることは、無分別智を我が物とし(「念仏は凡夫を仏にするいわれ」)、自分が世界の、自然の一部であることを知り、自然と一体化することであり(「世界 虚空 空気がわしが親様」)、この世にいることを丸ごと受け入れ、この世にあること自体を喜ぶ(「ここが浄土のなむあみだぶつ」)ことにもなるのである。つまりは、日々の仕事をこなし、念仏を唱えて、欲もなく、今いることを感謝しながら、心穏やかに生きることが、浄土としてのこの世を生きる最高の生き方になる。

称えるも あみだぶつ
家業するも あみだぶつ
ままをたべるも あみだぶつ
みちを歩くも あみだぶつ
世界のものは あみだぶつ
ことごとくあみだぶつもの (N101 - 102)

浅原才市のような人物は、縁起 他者との関係性 の中で自分が生きていることを知りながらも、あるいはそれゆえに、他と自分を比較することなく、個人の生を全うするという意味で、逆説的に大変個人的、個別的である。生きる意味 とは、才市にとって、ありとあらゆるものがすべて阿弥陀仏の仕業であることを知ることであり、事物の関連性の中で自分の 本分 を全うすることである。この点に関して、鈴木大拙が nature の訳語としての自然しぜんと日本古来の自然じねんという概念の相違について以下のように述べる時、私たちは才市の考えに触れることができる。以下引用文中の「自然」はすべて「じねん」と読む。

西洋のネイチュアには「自然」の義は全くない。Nature は自己^{セルフ}に対する客観的存在で、いつも相対性の世界である。「自然」には相対性はない。また客観的でない。むしろ主体的で絶対性をもっている。「自己本来に然り」という考えの中には、それに対峙して考えられるものはない。自他を離れた自体的、主体的なもの、これを「自然」という。¹⁵

自然^{じねん}という概念は、「自己本来に然り」、つまり あるがまま であることを善しとし、もの自体を絶対的存在と捉える概念である。松の木が松になるように、杉の木が杉になるように、各人は各人の仕事を全うすればそれで良いということになる。また念仏を唱えることは、このような予定調和的な世界を作った阿弥陀仏のありがたさを知る近道となる（「念仏は凡夫を仏にするいわれ」）。このような世界観を持つと、人は 西洋の男がそうであるのとは違って、所有欲に支えられたプロブルの帝国を築くことはないであろう。したがって、帝国主義や植民地主義、差別対象・客体としての他者を作り出すこともないであろう。

しかし世界全体が浄土であると捉えるこのような生き方は、予定調和的世界においてのみ可能であろうが、現実にはそのような世界は存在しない。このような人生観・世界観からは、貧困と闘うとか、不正と戦うといった、ポーヴォワール言うところの「生命よりもっと重要な目的」は出現し得ない。山紫水明な自然^{しぜん}に囲まれ、緑の匂いに囲まれた中で個人的生を生きる限りにおいては世界を浄土と捉えることは可能かもしれないが、人間の作った娑婆の世界を浄土と捉えるなら、疑うこと、批判することを欠いてしまい、結果的に、娑婆の世界を牛耳るシクスーが非難したような 男根的主体 をのさばらせることにつながり、その結果、日々の暮らしの苦しみを作り出す原因から目をそらすことになる。あるいはそもそも日々の苦しみさえ感じなくなるほどになる。これは現実逃避であり、「縁起」思想とは逆説的に、他者とのネットワークの中で自己を捉える考え方を欠いた生き方に墮してしまう。

浅原才市のような妙好人と呼ばれている人々の「呼称が一般化したのは江戸時代末期に仰誓などが編集した『妙好人伝』版行以後と考えられ」と、楠恭は言っている（N 8）。さらに楠は、『妙好人伝』において、たとえ「封建体制や社会道德の遵守、それに対する従順さと、真の他力念仏の信心とを混同してはいけない」（N 9）にしる、「本当の念仏者であることよりは、幕藩体制、封建倫理への順応性、真宗教団の護持と教化に従順な人々が多く取り上げられているという感を免れない」（N 9）とも述べているが、その通りであろう。関係性の中に自己を捉える生き方は、才市のように個別的・個人的であれ、ギリガンが分析したように間主観的であれ、暴力的でないという点で、男根主体的歴史がそうであった歴史に変わり得る可能性を秘めているとはいえ、それはまた明確

な自我意識の欠如した奴隷的従順さに陥る陥穽も秘めているのである。

(5)

以上見てきたように、主体のあり方は、文化と不可分の関係にある。おなじペニスをもった存在であれ、西洋男性のように去勢不安によってその 男性性 を育まれることもあれば、才市や日本の男たちのように去勢不安なしに生きる男達もまた存在するのである。性差 を考える時、各性の身体差を考慮に入れないわけにはいかないであろうが、私たちは、その身体差を理由に 各性の性性 として社会に定められたものの一方しか生きてこ(られ)なかった故に、欠如しているものが多くあるし、またそのためにジェンダーを拒否し、その欠如を埋めたいという欲求も、ポーヴォワールのように当然あるのである。

二項対立的思考法の西洋文化においては、男の主体 は、自律的、個別的であり、男 = 同一者 以外の者は客体であり、劣った位置を占めさせられた。それは男に対する女の、西洋に対するアジア・アフリカ等の被植民地国、等々に割り当てられた位置でもあった。被植民地が、西洋列強の文化・言語・宗教・生活様式等々を押し付けられたのと同様、女も男に都合の良いイメージを押し付けられ、女は男のように自由に生きることを制限された。しかしジェンダーが、社会・文化によって作られた性である以上、それは何も女のみに関係するのではなく、男の性もまたジェンダーの要素を持つ、つまり社会的に 作られたもの なのである。本質ではなく作られたものであるからこそポーヴォワールは「男」のように自由に生きることを価値あるものとし、そのような生き方を選択し、「男」のように生きたのである。彼女はかなりの年齢になるまでホテル暮らしをし、食事モレストランで済ませた。子供も敢えて持とうとはしなかった。彼女にはそのような当時あっては稀有な生き方を選択する強い意思と、男たちの中でさえ傑出している能力があったので、そのような生き方が可能だった。

確かに西洋の男たちが、今日にあっても世界のモデルとなるようなすぐれた文明を築いて来たことは事実であるが、しかし同時に、女の抑圧、黒人奴隷、被植民地等の負の側面も同時に持ち合わせてきたのである。シクスーはこの負の側面を、女として、ユダヤ人としての体験から暴き、告発して見せた。大部分の女は、男とは別個の肉体を持ち、又それを口実としてジェンダーの中に押し込められ、母になること(やならないこと)で、社会的文化的ゲッターに閉じ込められてきながらも形成してきた独自の文化の豊かさを形成してきたのだから、それを描くことで、二項対立的西洋文化に風穴をあけようとしたのである。女独自の文化、それはおのずと、母や女の身体性に裏打ちされたものであった。シクスーは母に象徴されるような生き方、自己を保ちながらも常に他者との関係性

の中であって、他者と愛の関係を築き、他者を受け入れ、そして他者体験によって、自己変革をし、高めていくような主体のあり方を描写した。シクスーのこのような主体は、自己 他者 自己という往復運動をするかぎりにおいて、ギリガンの「心配りの倫理」の持ち主として描かれた少女たちよりも、男性主体のようにかなり自律したより個別的な存在に近いように思える。シクスーの言う「新しい女」は、自律した主体を持ちながらも他者を拒まず、他者の中に入り、他者の体験をし、ふたたび自己に戻って、自己変革を重ねるのだから。実際、彼女は個別的・自律的な 男性的主体 を完全に否定しているのではなく、そのマイナス面を 男根的主体 として否定しただけなのだ。しかしいずれにしろ、シクスーの描く「女」もギリガンが分析したアメリカの少女たちも、他者が意識の中に濃厚に入り込んでいる点で、共通していると言えるだろう。そしてシクスーやギリガンは、このような投企によるのではない 他者体験による自己超越 の可能性をも顕示したのである。

しかし私たち日本人は、このような自他区別の境界が明確でない 間主観的主体（意識）のあり方が確かに予定調和的で非暴力的でないプラス面と同時に、その負の側面を持つことを既に経験済みだし、今も日々経験している。シクスー自身もその負の側面を 自己を無くすことの危険性を 自覚していた。（「彼女は彼女の危険を冒します。」）それは浅原才市に代表されるような意識のあり方に共通する負の側面である。それは、縁起的主体 観主観的主体 が、己を予定調和的な自然（や世界）の一部として、逆説的に、自分の本分を全うすればよいとする個別的・孤立的世界に陥ってしまう危険性であり、また疑うことや批判精神を欠如する危険性であり、積極的「自我意識」の欠如、「主体性」の欠如となって現れるものなのだ。それは主語を省く我々の言語にも現れている。鈴木大拙が言うように、「西洋世界に対しては、『分別ではない、無分別の分別だ』と拳揚し、翻って伝統世界に対しては『無分別ではない、無分別の**分別**だ』と強調する」¹⁶ のが良いのかもしれない。私たちはまだ、鈴木大拙の時代から、抜け出てはいないのであろう。いずれにしろ、男性的主体、女性的主体、共にプラス面とマイナス面があり、どちらか一方のみでは人間として不十分である。そして普段我々はその両面を時と場合により、使い分けているのであろう。

しかし男性性・男性的主体も女性性・女性的主体も長い歴史の中で作られてきたものであり、しかも社会が男性中心である以上、女（女性）は常に 男（男性）の前で弱い立場にあり、その文化も低く評価される傾向があることを常に注意しておく必要がある。明治以降、西洋という 男 の前で、日本という 女 はその 女性的文化 を劣ったものとする価値観を自ら内面化してしまった。例えば、はっきりと物を言う 男性的 西洋文化を前にすると、はっきりと物を言わない、とりわけノーと言わない 女性的 日本文化は、話し相手を傷つけまいとする配慮からされているにもかかわらず、

国際的に誤解を招く基となり、従ってやってはいけない話し方となる。また現今、男女共同参画社会を実現すると言う時、女が社会進出する側面（女の男性化）に光が当てられ、その反対の動きなくして男女共同参画社会は実現しえないにもかかわらず、男が女の領野へ進出することはあいかわらずはかどらないという現実がある。女の男性化は進んでも、男の女性化ははかどらない。その結果の弊害もまた出現している。

例えば、女が社会進出することで、手作りの食事が減り、外食や出来合いの食事をする機会が増加したが、外食は食事のバランス面や添加物等の不都合が多く、これは健康にとって不安要素である。これも仕事と言う男性文化の偏重であり、手作りの食事という女性文化の軽視の結果である。母乳育児の減少も、子育てより仕事という男性的価値の偏重のせいだと考えられなくもない。母乳育児の是非は、女の社会進出と言う側面からのみでなく、乳児の心身の発達面からも再考される必要があるのではないか。また年功序列型の日本型＝母性的労働形態から男性的競争原理が導入されつつある現在日本において、年功序列型経営には確かに怠惰を許すなどの弊害もあったが、真面目に勤務さえしていれば、安心して生涯設計をすることも可能であった。

男性的競争原理は貧富の差を生じやすいし、他者との協調を欠く嫌いもある。競争による勝者と敗者も生み出してしまう。何より自己主張が嫌われる女性的社会に長年暮らし、自己主張の下手な文化を築いてきた女性的日本人に、突然強力な自己主張を要求し、自分を売り込むことによりより有利な報酬や職場環境を求めて職場を渡り歩くことが前提となるような男性的競争原理に基づく雇用形態である年俸制や期間限定雇用を突然押し付けても、うまく作動するであろうか。フランスでは今も労働者はデモやストライキを頻発し、労働条件の改善を迫ると言う自己主張を行っている。日本では、不況下リストラがまるで当たり前のように是認され、リストラされてもさればなしが多いし、企業は人件費削減のためにパート労働者やフリーターを雇う傾向があるし、正社員に対しては、信じられないような残業を要求しても、それを断る労働者はほとんどいない。朝日新聞によると、あるサラリーマンは朝8時半に家を出、帰宅時間は午前0時過ぎであるが、これは日本のサラリーマンにとって例外的生活なのではない¹⁷。主客一体型の主体性を持つ日本人、自己主張の弱い日本人はこのような人権欠如型の労働形態を受容しやすいのである。競争原理が導入されつつある昨今、際立った能力のない若者は定職につけず、パートタイマーになることを余儀なくされている観もある。この現象を、雇用主という男を前にした、労働者という女の弱さと思なすことも可能であろう。日本のみならず、世界の政治においても、ブッシュ大統領のような男性的力の政策が女性的対話の政策を凌駕しつつある。男女は対等になったと信じられているにもかかわらず、現代の衣をまとった男女の優劣関係が、

あいかわらず存在するのである。

しかし 女=母 が築いてきた 間主観的主体性 という視点から行動を起こすことが、21世紀の人類や地球に必要なことも世界的に認識されつつあるのも事実である。例えば、自然(という女)は、単に環境保護の面からその重要性が再認識されだしたのではない。例えば、林や森があって初めて川や海が守られ、魚の生育環境が整えられるという共生・共存あるいは他者との相互関係の視点が再発見されている。政治における「テロとの闘い」において、ブッシュ大統領が彼の闘いに参加するものは味方、反対するものはテロリストと明言したようなあいかわらずの二元論ではなく、テロには反対だが、テロを生み出す土壌の検討無しにテロとの闘いなぞありえないというような立場、つまり他者の立場に対する配慮の顕現。グローバリゼーションという名の一元化に反対し、文化の多様性を擁護しようとする立場。あるいは、セクシュアリティの一元化に反対する立場、つまりヘテロセクシュアリティではなく、ホモセクシュアリティを含む多様な性の容認。障害者やマイノリティに対する配慮。このような立場は、女 が築いてきた文化、間主観的主体性の文化、客体というマイナーなもの視点に立脚した立場に通底するものである。

私は女が 女の文化・女の主体性・女性性 を守らなければならないと言っているのではない。女も男と同じように、自由に生きたいし、自己実現したいし、自己超越したいのだ。しかし 女の文化・女の主体性・女性性 の価値もまた守られねばならない一つの価値なのである。ポーヴォワールは、「女のドラマとは、常に自分を本質的なものとして主張しようとする主体の基本的な要求と、女を非本質的なものにしようとする状況の要請とのあいだで繰り返される葛藤なのだ」(DS38)と言った。これをシクサーやギリガン風に、女のドラマとは、常に自分を本質的なものとして主張しようとする主体の基本的な要求と、他者に対する配慮の要請とのあいだで繰り返される葛藤なのだ と言うこともできるであろう。そしてそれは男にとっても同じはずである。要はバランスの問題である。男性性・女性性 とされてきたものが、文化的・社会的に、つまり人為的に作られ、性別により強化されてきたものである限り、その分配もまた改変可能なはずである。如何に改変するか、これこそ男女を越えた新たな人間同士の関係性を築くものであり、新たな世界の枠組みを作ることになる。新たな関係性は、互いに出会う 全人的、換言するなら「両性性具有的」個々の人間同士が、その場やその時の状況に応じて築きあうものであり、そのとき 男性性 女性性 は男女の性別とは関係のないものに、また世界の南北とも関係のないものになることだろう。でも一体それはいつのことなのか。

注

- 1 シモーヌ・ド・ボーヴォワール『決定版 第二の性』I、16 - 17頁、新潮文庫、平成13年。(引用中の下線は、本稿中すべて松本による。なおこれ以後、この書からの引用は本文中に DS と略記し、ページ数を括弧内に記入する。)
- 2 例えば彼女は、友人のポール・ニザン夫妻が乳母車を押しているのを見て、そのようなシーンが自分の人生に登場しないことを願ったと、自伝に記している。
- 3 シモーヌ・ド・ボーヴォワール『決定版 第二の性』II 上、12頁、新潮文庫、平成13年。
- 4 シュラミス・ファイヤーストーン『性の弁証法』、評論社、1972、参照。
- 5 注3に同じ。
- 6 エレーヌ・シクスー「去勢か斬首か」『メデューサの笑い』67頁、紀伊国屋書店、1993。(以下この書からの引用は M と略記し文中にページ数を記す。)
- 7 この問題に関しては、拙論 *Le moi et les autres*, ed. Mireille Calle Gruber, *Hélène Cixous, croisées d'une œuvre*, Galilée, 2000. pp 255 - 263参照。
- 8 キャロル・ギリガン『もう一つの声』xiii、川島書店、1986
- 9 同上、109
- 10 名古屋大学の私の1、2年生のクラスで、小学校高学年まで母親と同室就寝を行ってきたものを尋ねると、毎年およそ100人中、1人か2人は存在する。
- 11 中川克子「母と息子の物語 鶴見祐輔の『母』をめぐって」『比較文學研究』70号、91頁、東大比較文學會、1997
- 12 同上、105頁。
- 13 阿満利磨『社会をつくる仏教』179頁、人文書院、2003。(以下、この書からの引用は S としてページ数を文中に記す。)
- 14 楠恭『NHK ころをよむ 信心の華 妙好人を語る』上、59頁、NHK 出版、1998。(以下この書からの引用は N と略記して文中にページ数を記す。)
- 15 鈴木大拙『東洋的な見方』220頁、岩波文庫、1997
- 16 同上、340頁。
- 17 2002年に非農林業において日本で週60時間以上働く男性の割合は、最も少ない20代後半でも 20.1%、最も多い30代後半では24.2%である。週71時間以上働く男性も5%いる。(朝日新聞、2003年6月20日、朝刊)